

◆6ページ上11行目から24ページ下9行目を中心に読み、教科書180ページの課題Bに取り組もう。

『こころ』は、「上 先生と私」「中 両親と私」「下 先生と遺書」の三つの部分から成り立ち、作品全体は、「私」の〈手記〉という形をとっている。まず、「上 先生と私」では、「先生」と〈私〉の出会いとその後のつきあいが描かれ、続く「中 両親と私」では、大学を卒業していったん故郷に帰った〈私〉が、故郷の家族と暮らしながら体験したできごとが描かれる。最後の「下 先生と遺書」には、故郷にいる〈私〉宛てに、ある日、「先生」から届いた長い手紙（遺書）の内容が、「先生」の言葉のままに紹介されている。

5

【上——先生と私】

「私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。」と書きだされる。「私はその人の記憶を呼び起こすごとに、すぐ「先生」と言いたくなる。筆を執っても心持ちは同じことである。よそよそしい頭文字などはとても使う気にならない。」とも書かれている。

10

〈私〉が〈先生〉と出会ったのは、まだ高等学校の学生だった〈私〉が、夏休みを利用して出かけた鎌倉の海岸である。東京に戻った〈私〉は〈先生〉の家に出入りするようになり、「先生」と〈私〉との交際が始まった。〈先生〉は〈奥さん〉とひっそりと暮らしていた。仲のよい夫婦であったが、二人の間には何か秘密があるように〈私〉には感じられた。〈先生〉は大学を卒業して、教養もあるのに、職に就いてはいなかった。〈私〉は〈先生〉に深く傾倒し、「先生」の思想や人生を知りたいと願うのだが、「先生」は心の奥に過去を秘めて語ろうとはしない。そのことに対してわだかまりを感じる〈私〉に、「先生」は、適当な時機が来たら、きっと自分の過去を残らず話そうと約束する。

5

【中——両親と私】

大学を卒業した〈私〉は、故郷へ帰った。〈私〉の両親は〈私〉の卒業を大変に喜び、客を呼んで卒業祝いをしようと計画するのだが、その日取りのまだ来ないうちに、明治天皇の病気の報が、新聞で日本中に知れわたった。しばらくすると、天皇崩御の知らせが届く。その頃から〈私〉の父の容体がしだいに衰え始めた。そして、「私」が東京へ戻ろうとする間際、父は腎臓病のために卒倒し、寝たきりの生活からやがて昏睡状態となる。そのような時、「私」のもとに〈先生〉から長い手紙が届いた。手紙の終わりのほうには、「この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう。」と書かれていた。手紙は〈先生〉の遺書であった。〈私〉は生死の境にある父や、その枕元に付き添う家族を後に残して、東京行きの汽車に飛び乗り、「先生」の遺書を読み始めた。

15

15

私（上・中）の（先生）は二十歳にならない時分に両親を亡くし、その後、故郷の新潟を離れて、東京の高等学校に入学した。私は夏休みが来るたびに故郷へ帰るが、三度めの夏休みに帰郷をした時、叔父が私の財産をごまかしていることを知った。私は残された財産を整理し、父母の墓に別れを告げると、二度と戻らないつもりで故郷を後にした。

東京に戻った私は、それまでの下宿を出て小石川こしかわの素人下宿に移る。日清戦争で戦死した軍人の遺族が住んでいる家で、若い娘が一人あった。私は奥さん（軍人の妻）やお嬢さん（娘）としだいにうちとけ、親しくなっていくが、そこに一人の男が入り込んできた。それがKである。

Kは私の子どもの頃からの友達で、新潟の寺の次男として生まれ、その後、医者いしやの家に養子に行き、将来は医者になるという条件で学資をもらって、私と一緒に東京の高等学校の同じ科に入学をした。しかし、宗教や哲学に関心を持ち、常に「精進」という言葉を口にするKは、医者になるつもりなどなく、やがて養家から絶縁された。Kは仕事をしながら学問を続けるが、しだいに神経衰弱しんけいすわくになっていく。私は大学二年の中頃、そうしたKを小石川の下宿に連れてきたのである。

第二学年の試験がすみ、夏休みになると、私はKを誘って、二人で旅をした。旅に出る前から、私はお嬢さんに対する自分の思いを、Kに打ち明けるつもりでいたが、結局は果たせなかった。また、旅の途中、Kと私は議論となり、その時、Kは「精神的に向上心がないものはばかだ」と言っ

15

て、私をやり込めたのだった。
やがて夏休みは終わり、最終学年である第三学年が始まる。その頃から、お嬢さんとKのふるま

いに、私が嫉妬しよと心から不快な気分を味わうようなことが、たびたびあった。

そのうち年が暮れて春になりました。ある日奥さんがKにかかるたをやるから誰か友達を連れてこないかと言ったことがあります。するとKはすぐ友達などは一人もないと答えたので、奥さんは驚いてしまいました。なるほどKに友達というほどの友達ともだちは一人もなかったのです。往来で会った時挨拶をするくらいのもは多少ありましたが、それらだつて決してかるたなどをとる柄ではなかったのです。奥さんはそれじゃ私の知ったものでも呼んできたらどうかと言い直しましたが、私もあいにくそんな陽気な遊びをする心持ちになれないので、いかげんな生返事をしたなり、

うちやっておきました。ところが晩になってKと私はどう

10

とうお嬢さんに引つ張り出されてしまいました。客も誰も来ないのに、内々うちうちの小人数こじんずだけでどうとうというかるたですからすこぶる静かなものでした。その上こういう遊技をや

15

りつけないKは、まるで懐手なつかをしている人と同様でした。私はKにいったい百人一首の歌を知っているのかと尋ねま

した。Kはよく知らないと答えました。私の言葉を聞いたお嬢さんは、おおかたKを軽蔑するとでもとつたのでしよう。それから眼まなこに立つようにKの加勢をいたしました。しまいには二人がほとんど組になって私に当たるといふありさまになってきました。私は相手しだいでは喧嘩けんかを始めたかもしれないのでした。幸いにKの態度は少しも最初と変わリませんでした。彼のどこにも得意らしい様子を認めなかつた私は、無事にその場を切り上げることができました。

5

それから二、三日たつた後のことでしたらう、奥さんとお嬢さんは朝から市ヶ谷いちがやにいる親類の所へ行くと行って宅うちを出ました。Kも私もまだ学校の始まらない頃でしたから、留守居同様あとに残っていました。私は書物を読むの散歩に出るのもいやだったので、ただ漠然と火鉢の縁に肘をのせてじつとあごを支えたなり考えていました。隣の室むろにいるKもいつこう音を立てませんでした。双方ともいるの

15

だかいのないのだからわからないくらい静かでした。もつともこういうことは、二人の間柄として別に珍しくもなんともなかったのですから、私はべつだんそれを気にもとめませんでした。

5

十時頃になって、Kは不意に仕切りの襖ふすまを開けて私と顔を見合わせました。彼は敷居しきいの上に立ったまま、私に何を考えていると聞きました。私はもとより何も考えていなかったのです。もし考えていたとすれば、いつものとおりのお嬢さんが問題だったかもしれない。そのお嬢さんにはむろん奥さんもくっついていますが、近頃ではK自身が切り離すべからざる人のように、私の頭の中をぐるぐるめぐって、この問題を複雑にしているのです。Kと顔を見合わせた私は、今までおぼろげに彼を一種の邪魔もののごとく意識していながら、明らかにそうと答えるわけにいかなかったのです。私は依然として彼の顔を見て黙っていました。するとKのほうからつかつかと私の座敷へ入ってきて、私のあたっている火鉢の前に座りました。私はすぐ両肘を火鉢の縁から取りのけて、心持ちそれをKのほうへ押しやるようにしました。

15

Kはいつもに似合わない話を始めました。奥さんとお嬢さんは市ヶ谷のどこへ行ったのだろうと言うのです。私はおおかた叔母さんの所だろうと答えました。Kはその叔母さんはなんだとまた聞きます。私はやはり軍人の細君だと教えてやりました。すると女の年始はたいてい十五日過ぎだのに、なぜそんなに早く出かけたのだろうと質問するのです。私はなぜだか知らないと挨拶するより外に仕方がありませんでした。



10

Kはなかなか奥さんとお嬢さんの話をやめませんでした。しまいには私も答えられないような立ち入ったことまで聞くのです。私はめんどろより不思議の感に打たれました。以前私のほうから二人を問題にして話しかけた時の彼を思い出すと、私はどうしても彼の調子の変わっているところに気がつかずにはいられないのです。私はとうとうなぜ今日に限ってそんなことばかり言うのかと彼に尋ねました。その時彼は突然黙りました。しかし私は彼の結んだ口元の

15

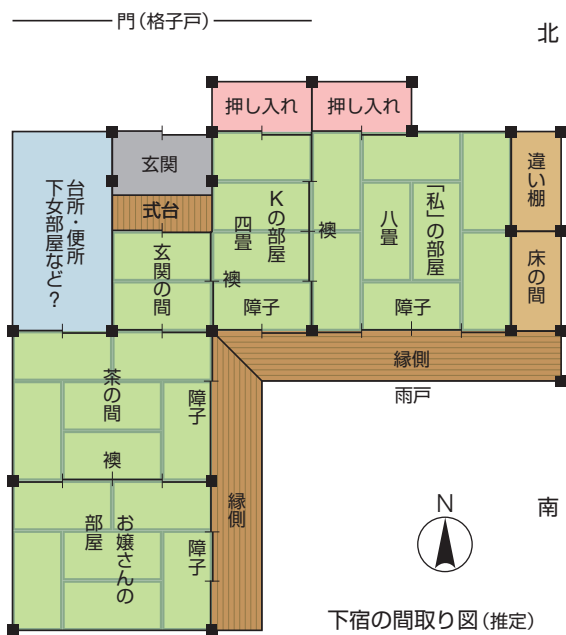
肉が震えるように動いているのを注視しました。彼は元来無口な男でした。平生から何か言おうとすると、言う前によく口のあたりをもぐもぐさせる癖がありました。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するようにたやすく開かないところに、彼の言葉の重みもこもっていたのでしよう。いったん声が口を破って出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。

5

彼の口元をちよつと眺めた時、私はまた何か出てくるなとすぐ感づいたのですが、それが果たしてなんの準備なのか、私の予算はまるでなかったのです。だから驚いたのです。彼の重々しい口から、彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像してみてください。私は彼の魔法棒のために一度に化石されたようなものです。口をもぐもぐさせるはたらきさえ、私にはなくなってしまうのです。

15

その時の私は恐ろしさの塊と言いましようか、または苦しさの塊と言いましようか、なにしろ一つの塊でした。石か鉄のように頭から足の先までが急に固くなったのです。



下宿の間取り図(推定)

呼吸をする弾力性さえ失われたくらいに固くなったのです。幸いなことにその状態は長く続きませんでした。私は一瞬間の後に、また人間らしい気分を取り戻しました。そうして、すぐしまったと思いました。先を越されたなと思いましたが。

5

しかしその先をどうしようという分別はまるで起こりません。おそらく起こるだけの余裕がなかったのでしょう。私は脇の下から出る気味の悪い汗がシャツにしみ透るのをじつと我慢して動かずいました。Kはその間いつものとおりに重い口を切っては、ぽつりぽつりと自分の心を打ち明けてゆきます。私は苦しくってたまりませんでした。おそらくその苦しさは、大きな広告のように、私の顔の上にはつきりした字で貼り付けられてあつたらうと私は思うのです。いくらKでもそこに気のつかないはずはないのですが、彼はまた彼で、自分のことに一切を集中しているから、私の表情などに注意する暇がなかったでしょう。彼の自白は最初から最後まで同じ調子で貫いていました。重くてのろいかわりに、とても容易なことでは動かせないという

15

二人はめいめいの室に引き取ったぎり顔を合わせませんでした。Kの静かなことは朝と同じでした。私もじつと考へ込んでいました。

5

私は当然自分の心をKに打ち明けるべきはずだと思いましたが。しかしそれにはもう時機が遅れてしまったという気も起こりました。なぜさつきKの言葉を遮って、こつちから逆襲しなかったのか、そこが非常な手ぬかりのように見えてきました。せめてKの後に続いて、自分は自分の思うとおりをその場で話してしまつたら、まだよかつたらうにも考えました。Kの自白に一段落がついた今となつて、こつちからまた同じことを切り出すのは、どう思案しても変でした。私はこの不自然に打ち勝つ方法を知らなかったのです。私の頭は悔恨に揺られてぐらぐらしました。

15

私はKが再び仕切りの襖を開けて向こうから突進してき

感じを私に与えたのです。私の心は半分その自白を聞いていながら、半分どうしようどうしようという念に絶えずかき乱されていきましたから、細かい点になるとほとんど耳へ入らないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響きました。そのために私は前言った苦痛ばかりでなく、時には一種の恐ろしさを感じるようになったのです。つまり相手は自分より強いのだという恐怖の念がぎざし始めたのです。

5

Kの話がひととおり済んだ時、私はなんとも言ふことができませんでした。こつちも彼の前に同じ意味の自白をしたものだろうか、それとも打ち明けずにいるほうが得策だろうか、私はそんな利害を考えて黙っていたのではありません。ただ何事も言えなかったのです。また言う気にもならなかったのです。

15

昼飯の時、Kと私は向かい合わせに席を占めました。下女に給仕をしてもらつて、私はいつにないまずい飯を済ませました。二人は食事中もほとんど口をききませんでした。奥さんとお嬢さんはいつ帰るのだからわかりませんでした。

てくれればいいと思いました。私に言わせれば、さつきは

まるで不意打ちにあつたも同じでした。私にはKに応ずる準備も何もなかったのです。私は午前に失つたものを、今度を取り戻そうという下心をもっていました。それで時々眼を上げて、襖を眺めました。しかしその襖はいつまでたつても開きません。そうしてKは永久に静かなのです。

5

そのうち私の頭はだんだんこの静かさにかき乱されるようになってきました。Kは今襖の向こうで何を考えているだろうと思うと、それが気になつてたまらないのです。ふだんもこんなふうにお互いが仕切り一枚を間に置いて黙り合っている場合は始終あつたのですが、私はKが静かであればあるほど、彼の存在を忘れるのが普通の状態だったのですから、その時の私はよほど調子が狂つていたものとみなければなりません。それでいて私はこつちから進んで襖を開けることができなかつたのです。いったん言いそびれ

15

た私は、また向こうからはたらきかけられる時機を待つように外に仕方がなかったのです。

しまいに私はじっとしておられなくなりました。無理にじっとしていれば、Kの室へ飛び込みたくなるのです。私は仕方なしに立って縁側へ出ました。そこから茶の間へ来て、なんとという目的もなく、鉄瓶の湯を湯呑み^{ゆのみ}について一杯飲みました。それから玄関へ出ました。私はわざとKの室を回避するようにして、こんなふう^{こうなふう}に自分を往來の真ん中に見いだしたのです。私にはむろんどこへ行くというありでもありません。ただじっとしていられないだけででした。それで方角も何もかまわずに、正月の町を、むやみに歩き回ったのです。私の頭はいくら歩いてもKのことではないいになっていました。私もKを振るい落とす気で歩き回るわけではなかったのです。むしろ自分から進んで彼の姿を咀嚼^{そじやく}しながらうろついていたのです。

私には第一に彼が解しがたい男のように見えました。どうしてあんなことを突然私に打ち明けたのか、またどうして打ち明けなければいられないほどに、彼の恋が募^もつてききがかんりの距離でも耳に立つのです。俚はやがて門前で止まりました。

私が夕飯に呼び出されたのは、それから三十分ばかりたった後のことでしたが、まだ奥さんとお嬢さんの晴れ着が脱ぎ捨てられたまま、次の室を乱雑に彩^{いろ}っていました。二人は遅くなると私たちにすまないというので、飯の支度に間に合うように、急いで帰ってきたのだそうです。しかし奥さんの親切はKと私とにとってほとんど無効も同じことでした。私は食卓に座りながら、言葉を惜しがる人のように、素っ気ない挨拶ばかりしていました。Kは私よりもなお寡言^{こくごん}でした。たまに親子連れで外出した女二人の気分が、また平生よりはすぐれて晴れやかだったので、我々の態度はなおのこと眼につきます。奥さんは私にどうかしたのかと聞きました。私は少し心持が悪いと答えました。実際私は心持が悪いのです。すると今度はお嬢さんがKに同じ問いをかけました。Kは私のように心持が悪い

たのか、そうして平生の彼はどこに吹き飛ばされてしまったのか、すべて私には解しにくい問題でした。私は彼の強いことを知っていました。また彼の真面目なことを知っていました。私はこれから私の取るべき態度を決する前に、彼について聞かなければならぬ多くをもっていると感じました。同時にこれから先彼を相手にするのが変に気味が悪かったのです。私は夢中に町の中を歩きながら、自分の室にじっと座っている彼の容貌を始終眼の前に描き出ししました。しかもいくら私が歩いても彼を動かすことはとうていできないのだという声はどこかで聞こえるのです。つまり私には彼が一種の魔物のように思えたからでしょう。私は永久彼に祟^{たた}られたのではなからうかという気さえしました。

私が疲れて宅へ帰った時、彼の室は依然として人気のないように静かでした。

◆ 私が宅へ入ると間もなく俚^{くろま}の音が聞こえました。今のよう

うにゴム輪のない時分でしたから、がらがらいういやな響いととは答えません。ただ口がききたくないからだと言いました。お嬢さんはなぜ口がききたくないのかと追及しました。私はその時ふと重たいまぶたを上げてKの顔を見ました。私にはKがなんと答えるだろうかという好奇心があったのです。Kの唇は例のように少し震えていました。それが知らない人から見ると、まるで返事に迷っているかと思われぬのです。お嬢さんは笑いながらまた何か難しいことを考えているのだろうと言いました。Kの顔は心持ち薄赤^{うすあか}くなりました。

その晩私はいつもより早く床へ入りました。私が食事の時気分が悪いと言ったのを気にして、奥さんは十時頃蕎麦^{そば}湯^ゆを持ってきてくれました。しかし私の室はもう真つ暗でした。奥さんはおやおやと言つて、仕切りの襖を細目に開けました。ランプの光がKの机から斜めにぼんやりと私の室に差し込みました。Kはまだ起きていたものとみえます。奥さんは枕元に座つて、おおかた風邪を引いたのだろうか

ら身体を暖ためるがいいと言って、湯呑みを顔のそばへ突きつけるのです。私はやむを得ず、どろどろした蕎麦湯を奥さんの見ている前で飲みました。

私は遅くなるまで暗い中で考えていました。むろん一つ問題をぐるぐる回転させるだけで、外になんの効力もなかったのです。私は突然Kが今隣の室で何をしているだろうと思いましたが。私は半ば無意識においと声をかけました。すると向こうでもおいと返事をしました。Kもまだ起きていたのです。私はまだ寝ないのかと襖越しに聞きま

5

した。もう寝るといふ簡単な挨拶がありました。何をしてい

10

るので私は重ねて聞きました。今度はKの答えがありません。その代わり五、六分たったと思う頃に、押し入れをがらりと開けて、床を延べる音が手に取るように聞きました。私はもう何時かとまた尋ねました。Kは一時二十分だと答えました。やがてランプをふっと吹き消す音がして、家中が真っ暗なうちに、しんと静まりました。

15

しかし私の眼はその暗い中でいよいよ冴えてくるばかりです。私はまた半ば無意識な状態で、おいとKに声をかけつつもりで、暗に用意をしていた私が、折があったらこっちで口を切ろうと決心するようになったのです。

同時に私は黙ってうちのものの様子を観察してみました。

しかし奥さんの態度にもお嬢さんの素振りにも、別に平生と変わった点はありませんでした。Kの自白以前と自白以後とで、彼らの挙動にこれという差違が生じないならば、彼の自白は単に私だけに限られた自白で、肝心の本人にも、またその監督者たる奥さんにも、まだ通じていないのは確かでした。そう考えた時私は少し安心しました。それで無理に機会をこしらえて、わざとらしく話を持ち出すよりは、自然の与えてくれるものを取り逃がさないようにするほうがよからうと思つて、例の問題にはしばらく手を着けずにとつとしておくことにしました。

5

こう言つてしまえば大変簡単に聞こえますが、そうした心の経過には、潮の満干と同じように、いろいろの高低があったのです。私はKの動かない様子を見て、それにさまざまな意味を付け加えました。奥さんとお嬢さんの言語動作を観察して、二人の心が果たしてそこに現れていると

15

ました。Kも以前と同じような調子で、おいと答えました。私は今朝彼から聞いたことについて、もつと詳しい話をしたいが、彼の都合はどうだと、とうとうこつちから切り出しました。私はむろん襖越しにそんな談話を交換する気はなかつたのですが、Kの返答だけは即座に得られることと考へたのです。ところがKはさつきから二度おいと呼ばれて、二度おいと答えたような素直な調子で、今度は応じません。そうだなあと低い声で洩つています。私はまたはつと思わせられました。



10

Kの生返事は翌日になつても、その翌日になつても、彼の態度によく現れていました。彼は自分から進んで例の問題に触れようとする気色を決して見せませんでした。もつとも機会もなかつたのです。奥さんとお嬢さんがそろつて一日宅を空けでもしなければ、二人はゆっくり落ち着いて、そういうことを話し合うわけにもいかないのですから。私はそれをよく心得ていました。心得ていながら、変にいらしらすのです。その結果初めは向こうから来るのを待

15

りなのだろうかと思つてもみました。そうして人間の胸の中に装置された複雑な器械が、時計の針のように、明瞭に偽りなく、盤上の数字を指し得るものだろうかと思へました。要するに私は同じことをこつちも取り、ああも取りしたあげく、ようやくここに落ち着いたものと思つてください。さらに難しく言えば、落ち着くなどという言葉は、この際決して使われた義理でなかつたのかもしれない。

5

そのうち学校がまた始まりました。私たちは時間の同じ日には連れ立って宅を出ます。都合がよければ帰る時にもやはり一緒に帰りました。外部から見たKと私は、なんにも前と違つたところがないように親しくなつたのです。けれども腹の中では、てんでんにてんでんのことを勝手に考へていたに違いありません。ある日私は突然往來でKに肉薄しました。私が第一に聞いたのは、この間の自白が私だけに限られているか、または奥さんやお嬢さんにも通じているかの点にあつたのです。私のこれから取るべき態度は、この問いに対する彼の答えしだいで決めなければならぬと、私は思つたのです。すると彼は外の人にはまだ誰にも

15

打ち明けていないと明言しました。私は事情が自分の推察どおりだったので、内心うれしがりました。私はKの私より横着なのをよく知っていました。彼の度胸にもかなわないという自覚があったのです。けれども一方ではまた妙に彼を信じていました。学資のことで養家を三年も欺いていた彼ですけれども、彼の信用は私に対して少しも損なわれていなかったのです。私はそれがためにかえって彼を信じだしたくらいです。だからいくら疑い深い私でも、明白な彼の答えを腹の中で否定する気は起こりようがなかったのです。

10

私はまた彼に向かって、彼の恋をどう取り扱うつもりかと尋ねました。それが単なる自白に過ぎないのか、またはその自白について、実際的な効果をも収める気なのかと問うたのです。然るに彼はそこになると、なんにも答えません。黙って下を向いて歩きだします。私は彼に隠し立てをしてくれるな、すべて思ったとおりを話してくれと頼みました。彼は何も私に隠す必要はないとはつきり断言しました。しかし私の知ろうとする点には、一言の返事も与えないので

15

種々な心持ちがしました。

Kは低い声で勉強かと聞きました。私はちよつと調べものがあるのだと答えました。それでもKはまだその顔を私から放しません。同じ低い調子で一緒に散歩をしないかと言うのです。私は少し待っていればしてもいいと答えました。彼は待っていると言ったまま、すぐ私の前の空席に腰を下ろしました。すると私は気が散って急に雑誌が読めなくなりしました。なんだかKの胸に一物があつて、談判でもしに來られたように思われて仕方がないのです。私はやむを得ず読みかけた雑誌を伏せて、立ち上がろうとしました。Kは落ちつき払つてもう済んだのかと聞きます。私はどうでもいいのだと答えて、雑誌を返すとともに、Kと図書館を出ました。

10

二人は別に行く所もなかったので、龍岡町から池の端へ出て、上野の公園の中へ入りました。その時彼は例の事件

15

す。私も往來だからわざわざ立ち止まってそこまで突き止めるわけにいきません。ついそれなりにしてしまいました。



ある日私は久しぶりに学校の図書館に入りました。私は広い机の片隅で窓から射す光線を半身に受けながら、新着の外国雑誌を、あちらこちらとひっくり返して見ていました。私は担任教師から専攻の学科に関して、次の週までにある事項を調べてこいと命ぜられたのです。しかし私に必要な事柄がなかなか見つからないので、私は二度も三度も雑誌を借り替えなければならませんでした。最後に私はやつと自分に必要な論文を探し出して、一心にそれを読みだしました。すると突然幅の広い机の向こう側から小さな声で私の名を呼ぶものがあります。私はふと眼を上げてそこに立っているKを見ました。Kはその上半身を机の上に折り曲げるようにして、彼の顔を私に近づけました。御承知のとおり図書館では他の人の邪魔になるような大きな声で話をするわけにゆかないのですから、Kのこの所作は誰でもやる普通のことなのですが、私はその時に限って、一

15

について、突然向こうから口を切りました。前後の様子を総合して考えると、Kはそのため私をわざわざ散歩に引っ張り出したらしいのです。けれども彼の態度はまだ實際的の方面へ向かつてちつとも進んでいませんでした。彼は私に向かって、ただ漠然と、どう思うと言うのです。どう思うというのは、そうした恋愛の淵に陥つた彼を、どんな眼で私が眺めるかという質問なのです。一言で言うと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです。そこに私は彼の平生と異なる点を確かに認めることができたと思いました。たびたび繰り返すようですが、彼の天性は他の思惑をはばかり弱くでき上がってはいなかったのです。こうと信じたら一人でどんどん進んで行くだけの度胸もあり勇気もある男なのです。養家事件でその特色を強く胸のうちに彫り付けられた私が、これは様子が違つと明らかに意識したのは当然の結果なのです。

15

私がKに向かつて、この際なんで私の批評が必要なのかと尋ねた時、彼はいつもにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが実際恥ずかしいと言いました。そうして迷っているから自分で自分がわからなくなってしまうので、私に公平な批評を求めるより外に仕方がないと言いました。私はすかさず迷うという意味を聞きただしました。彼は進んでいいか退いていいか、それに迷うのだと説明しました。私はすぐ一步先へ出ました。そうして退こうと思えば退けるのかと彼に聞きました。すると彼の言葉がそこで不意に行き詰まりました。彼はただ苦しいと言っただけでした。実際彼の表情には苦しそうなところがありありと見えていました。もし相手がお嬢さんでなかったならば、私はどんなに彼に都合のいい返事を、その渴き切った顔の上に慈雨のごとく注いでやったかわかりません。私はそのくらいの美しい同情をもって生まれてきた人間と自分ながら信じています。しかしその時の私は違っていました。



じような口調で、再び彼に投げ返したのです。しかし決して復讐ではありません。私は復讐以上に残酷な意味をもっていたというのを自白します。私はその一言でKの前に横たわる恋の行く手を塞ごうとしたのです。

Kは真宗寺に生まれた男でした。しかし彼の傾向は中学時代から決して生家の宗旨に近いものではなかったのです。教義上の区別をよく知らない私が、こんなことを言う資格に乏しいのは承知していますが、私はただ男女に関係した点についてのみ、そう認めていたのです。Kは昔から精進という言葉が好きでした。私はその言葉の中に、禁欲という意味もこもっているのだろうと解釈していました。しかし後で実際に聞いてみると、それよりもまだ嚴重な意味が含まれているので、私は驚きました。道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条なのです。節欲や禁欲は無論、たとえ欲を離れた恋そのものでも

私はちょうど他流試合でもする人のようにKを注意して見ていたのです。私は、私の眼、私の心、私の身体、すべて私という名のつくものを五分の間もないうちに用意して、Kに向かったのです。罪のないKは穴だらけというようにむしる開け放しと評するのが適当なくらいに無用心でした。私は彼自身の手から、彼の保管している要塞の地図を受け取って、彼の眼の前でゆっくりそれを眺めることができても同じでした。

Kが理想と現実の間に彷徨してふらふらしているのを見つけた私は、ただひと打ちで彼を倒すことができるだろうという点にばかり眼をつけました。そうしてすぐ彼の虚につけ込んだのです。私は彼に向かつて急に厳肅な改まった態度を示しました。無論策略からですが、その態度に相応するくらいな緊張した気分もあつたのですから、自分に滑稽だの羞恥だのを感じず余裕はありませんでした。私はまず「精神的に向上心のないものはばかだ」と言い放ちました。これは二人で房州を旅行している際、Kが私に向かつて使った言葉です。私は彼の使ったとおりを、彼と同

道の妨げになるのです。Kが自活生活をしている時分に、私はよく彼から彼の主張を聞かされたのです。その頃からお嬢さんを思っていた私は、いきおいどうしても彼に反対しなければならなかったのです。私が反対すると、彼はいつでも気の毒そうな顔をしました。そこには同情よりも侮蔑のほうがよけいに現れていました。

こういう過去を二人の間に通り抜けてきているのですから、精神的に向上心のないものはばかだという言葉は、Kにとつて痛いには違いなかったのです。しかし前にも言ったとおり、私はこの一言で、彼がせっかく積み上げた過去を蹴散らしたつもりではありません。かえってそれを今までどおり積み重ねてゆかせようとしたのです。それが道に達しようが、天に届こうが、私はかまいません。私はただKが急に生活の方向を転換して、私の利害と衝突するのを恐れたのです。要するに私の言葉は単なる利己心の発現でし

た。

「精神的に向上心のないものは、ばかだ」

私は二度同じ言葉を繰り返しました。そうして、その言葉がKの上はどう影響するかを見つめていました。

「ばかだ」とやがてKが答えました。「僕はばかだ」

Kはぴたりとそこへ立ち止まったまま動きません。彼は地面の上を見つめています。私は思わずぎよつとしました。私にはKがその刹那に居直り強盗のごとく感ぜられたのです。しかしそれにしても彼の声がいかにも力に乏しいということに気がつきました。私は彼の眼遣いを参考にしたかったのですが、彼は最後まで私の顔を見ないので。そうして、そろそろとまた歩きだしました。



私はKと並んで足を運ばせながら、彼の口を出る次の言葉を腹の中で暗に待ち受けました。あるいは待ち伏せと言ったほうがまだ適当かもしれません。その時の私はたといKを騙し打ちにしてもかまわないくらいに思っていたのです。しかし私にも教育相当の良心はありますから、もし

と今度は頼むように言い直しました。私はその時彼に向かって残酷な答えを与えたのです。狼が隙を見て羊の咽喉^{のど}へ食らいつくように。

「やめてくれて、僕が言いだしたことじゃない、もともと君のほうから持ち出した話じゃないか。しかし君がやめたければ、やめてもいいが、ただ口先でやめたって仕方があるまい。君の心でそれをやめるだけの覚悟がなければ。いったい君は君の平生の主張をどうするつもりなのか」

私がこう言った時、背の高い彼は自然と私の前に萎縮して小さくなるような感じがしました。彼はいつも話すとおりの正直者でしたから、自分の矛盾などをひどく非難される場合には、決して平気でいられない質^{たち}だったのです。私は彼の様子を見てようやく安心しました。すると彼は突然「覚悟？」と聞きました。そうして私がまだ何とも答えな

誰か私のそばへ来て、おまえは卑怯^{ひきょう}だとひと言ささやいてくれるものがあつたなら、私はその瞬間に、はつと我に立ち返つたかもしれません。もしKがその人であつたなら、

私はおそらく彼の前に赤面したでしょう。ただKは私をたしなめるにはあまりに正直でした。あまりに単純でした。あまりに人格が善良だったのです。目のくらんだ私は、そこに敬意を払うことを忘れて、かえってそこにつけ込んだのです。そこを利用して彼を打ち倒そうとしたのです。

Kはしばらくして、私の名を呼んで私のほうを見ました。今度は私のほうで自然と足を止めました。するとKも止まりました。私はその時やつとKの眼を真向きに見ることができたのです。Kは私より背の高い男でしたから、私はいきおい彼の顔を見上げるようにしなければなりません。私はそうした態度で、狼^{おおかみ}のごとき心を罪のない羊に向けたのです。

「もうその話はやめよう」と彼が言いました。彼の眼にも彼の言葉にも変に悲痛なところがありました。私はちよつと挨拶ができなかつたのです。するとKは、「やめてくれ」

い先に「覚悟、——覚悟ならないうこともない」と付け加えました。彼の調子は独り言のようでした。また夢の中の言葉のようでした。

二人はそれぎり話を切り上げて、小石川⁹の宿の方に足を向けました。わりあい風のない暖かな日でしたけれども、なにしろ冬のことですから、公園の中は淋しいものでした。ことに霜に打たれて青みを失った杉の木立の茶褐色が、薄黒い空の中に、梢^{すえ}を並べてそびえているのを振り返って見た時は、寒さが背中へかじりついたような心持ちがしました。我々は夕暮れの本郷台¹⁰を急ぎ足でどしどし通り抜けて、また向こうの丘へ登るべく小石川の谷へ下りたのです。私はその頃になって、ようやく外套^{がいとう}の下に体の温かみを感じだしたくらいです。

急いだためでもありませんでしたが、我々は帰り道にはほとんど口をききませんでした。宅へ帰って食卓に向かった時、

9 小石川 現在の東京都文京区の地名(当時は小石川区)。

10 本郷台 現在の東京都文京区の一部。西は小石川、東は上野に接する一帯の台地。

奥さんはどうして遅くなったのかと尋ねました。私はKに誘われて上野へ行つたと答えました。奥さんはこの寒いのにと言つて驚いた様子を見せました。お嬢さんは上野に何があつたのかと聞きたがります。私は何もないが、ただ散歩したのだという返事だけしておきました。平生から無口なKは、いつもよりなお黙っていました。奥さんが話しかけても、お嬢さんが笑つても、ろくな挨拶はしませんでした。それから飯をのみ込むようにかき込んで、私がまだ席を立たないうちに、自分の室へ引き取りました。



その頃は覚醒とか新しい生活とかいう文字もんじのまだない時分でした。しかしKが古い自分をさらりと投げ出して、一意に新しい方角へ走りださなかつたのは、現代人の考えが彼に欠けていたからではないのです。彼には投げ出すことのできないほど尊い過去があつたからです。彼はそのため今日まで生きてきたと言つてもいいくらいなのです。だからKが一直線に愛の目的物に向かつて猛進しないといつて、決してその愛の生ぬるいことを証拠だてるわけにはゆ

の名を呼ぶ声で眼を覚めました。見ると、間の襖が二尺11ばかり開いて、そこにKの黒い影が立っています。そうして彼の室には宵のとおりまだ灯火あかりがついているのです。急に世界の変つた私は、少しの間口をきくこともできず、ぼうつとして、その光景を眺めていました。

その時Kはもう寝たのかと聞きました。Kはいつでも遅くまで起きている男でした。私は黒い影法師のようなKに向かつて、何か用かと聞き返しました。Kはたいした用でもない、ただもう寝たか、まだ起きているかと思つて、便所へ行つたついでに聞いてみただけだと答えました。Kはランプの灯を背中に受けているので、彼の顔色や眼つきは、全く私にはわかりませんでした。けれども彼の声はふだんよりもかえつて落ち着いていたくらいでした。

Kはやがて開けた襖をぴたりと立て切りました。私の室はすぐ元の暗闇に返りました。私はその暗闇より静かな夢

きません。いくら熾烈しれつな感情が燃えていても、彼はむやみに動けないのです。前後を忘れるほどの衝動が起こる機会を彼に与えない以上、Kはどうしてもちよつと踏みとどまつて自分の過去を振り返らなければならなかつたのです。そうすると過去が指し示す道を今までどおり歩かなければならなくなるのです。その上彼には現代人のもたない強情と我慢がありました。私はこの双方の点においてよく彼の心を見抜いていたつもりなのです。

上野から帰つた晩は、私にとって比較的安静な夜よでした。私はKが室へ引き上げたあとを追いかけて、彼の机のそばに座り込みました。そうしてとりとめもない世間話をわざと彼に仕向けました。彼は迷惑そうでした。私の眼には勝利の色が多少輝いていたでしょう。私の声には確かに得意の響きがあつたのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手をかざした後、自分の室に帰りました。外のことにかけては何をしても彼に及ばなかつた私も、その時だけは恐るるに足りないという自覚を彼に対してもつていたのです。

私はほどなく穏やかな眠りに落ちました。しかし突然私を見るべくまた眼を閉じました。私はそれぎり何も知りません。しかし翌朝になって、昨夕ゆうぐのことを考えてみると、なんだか不思議でした。私はことによると、すべてが夢ではないかと思ひました。それで飯を食う時、Kに聞きました。Kは確かに襖を開けて私の名を呼んだと言います。なぜそんなことをしたのかと尋ねると、別にはつきりした返事もしません。調子の抜けた頃になって、近頃は熟睡じゅくすいができるのかとかえつて向こうから私に問うのです。私はなんだか変に感じました。

その日はちょうど同じ時間に講義の始まる時間割になつていたので、二人はやがて一緒に宅を出ました。今朝から昨夕のことが気にかかっている私は、途中でまたKを追及しました。けれどもKはやはり私を満足させるような答えをしません。私はあの事件について何か話すつもりではなかつたのかと念を押してみました。Kはそうではないと強

11 二尺「尺」は長さの単位。一尺は約三〇センチ

い調子で言い切りました。昨日上野で「その話はもうやめよう」と言ったではないかと注意するごとくにも聞こえませんでした。Kはそういう点にかけて鋭い自尊心をもった男なのです。ふとそこに気のついた私は突然彼の用いた「覚悟」という言葉を連想しました。すると今までまるで気にならなかったその二字が妙な力で私の頭を抑え始めたのです。



Kの果断に富んだ性格は私によく知れていました。彼のこの事件についてのみ優柔なわけも私にはちゃんとのみ込めていたのです。つまり私は一般を心得た上で、例外の場合をしっかりと捕まえたつもりで得意だったのです。ところが「覚悟」という彼の言葉を、頭の中で何遍も咀嚼しているうちに、私の得意はだんだん色を失って、しまいにはぐらぐら揺き始めるようになりました。私はこの場合もあるいは彼にとって例外でないのかもしれないと思いだしたのです。すべての疑惑、煩悶、懊惱、を一度に解決する最後の手段を、彼は胸の中に畳み込んでいるのではなからうか

した。

一週間の後私はとうとう堪え切れなくなって仮病を使いました。奥さんからお嬢さんからも、K自身からも、起きろという催促を受けた私は、生返事をしただけで、十時頃まで布団をかぶって寝ていました。私はKもお嬢さんもなくなくなって、家の中がひっそり静まった頃を見計らって寢床を出ました。私の顔を見た奥さんは、すぐどこが悪いかと尋ねました。食べ物や枕元へ運んでやるから、もつと寝ていたらよかろうと忠告してもくれませんでした。身体に異状のない私は、とても寝る気にはなれません。顔を洗っているものとお茶の間で飯を食いました。その時奥さんは長火鉢の向こう側から給仕をしてくれたのです。私は朝飯とも昼飯とも片付かない茶碗を手持ったまま、どんなふう

に問題を切り出したものだろうかと、そればかりに屈託していたから、外観からは実際気分がよくない病人らしく見えただろうと思います。

私は飯を終わらせたばを吹かしました。私が立たないので奥さんも火鉢のそばを離れるわけにゆきません。下

と疑ぐり始めたのです。そうした新しい光で覚悟の二字を眺め返してみた私は、はっと驚きました。その時の私もしこの驚きをもって、もう一遍彼の口にした覚悟の内容を公平に見回したらば、まだよかつたかもしれません。私はただKがお嬢さんに対して進んで行くという意味にその言葉を解釈しました。果断に富んだ彼の性格が、恋の方面に発揮されるのがすなわち彼の覚悟だろうといちずに思い込んでしまったのです。

私は私にも最後の決断が必要だという声を心の耳で聞きました。私はすぐその声に応じて勇気を振り起こしました。私はKより先に、しかもKの知らない間に、事を運ばなくてはならないと覚悟を決めました。私は黙って機会をねらっていました。しかし二日たつても三日たつても、私はそれを捕まえることができません。私はKのいない時、またお嬢さんの留守な折を待って、奥さんに談判を開こうと考えたのです。しかし片方がいなければ、片方が邪魔をするといったふうの日はかり続いて、どうしても「今だ」と思う好都合が出てきてくれないのです。私はいらいらしま

女を呼んで膳を下げさせた上、鉄瓶に水をさしたり、火鉢の縁を拭いたりして、私に調子を合わせています。私は奥さんに特別な用事でもあるのかと問いました。奥さんはいえと答えましたが、今度は向こうでなぜですと聞き返してきました。私は実は少し話したいことがあるのだと言いました。奥さんはなんですかと言って、私の顔を見ました。奥さんの調子はまるで私の気分に入り込めないような軽いものでしたから、私は次に出すべき文句も少し渋りました。私は仕方なしに言葉の上で、いい加減にうるつき回った末、Kが近頃何か言いはしなかつたかと奥さんに聞いてみました。奥さんは思いもよらないというふうをして、「何を？」とまた反問してきました。そうして私の答える前に、「あなたには何かおっしゃったんですか」とかえって向こうで聞くのです。

Kから聞かされた打ち明け話を、奥さんに伝える気のない私は、「いいえ」と言ってしまった後で、すぐ自分の嘘を快からず感じました。仕方がないから、別段何も頼

まれた覚えはないのだから、Kに関する用件ではないのだ
と言いつ直しました。奥さんは「そうですか」と言つて、後
を待っています。私はどうしても切り出さなければならな
くなりしました。私は突然「奥さん、お嬢さんを私にくださ
い」と言いました。奥さんは私の予期してかかったほど驚
いた様子も見せませんでした。それでもしばらく返事が
できなかったものとみえて、黙つて私の顔を眺めていまし
た。一度言い出した私は、いくら顔を見られても、それに
頓着とんじやくなどはしていられませぬ。「ください、ぜひください」
と言いました。「私の妻としてぜひください」と言いまし
た。奥さんは年を取つているだけに、私よりもずつと落ち
着いていました。「あげてもいいが、あんまり急じゃあり
ませぬか」と聞くのです。私が「急にもraitたいのだ」と
すぐ答えたら笑いだしました。そうして「よく考えたので
すか」と念を押すのです。私は言い出したのは突然でも、
考えたのは突然でないというわけを強い言葉で説明しまし
た。

それからまだ二つ三つの問答がありました。私はそれ

自分の室へ帰つた私は、事のあまりにわけもなく進行し
たのを考えて、かえつて変な気持ちになりました。果たし
て大丈夫なのだろうかという疑念さえ、どこからか頭の底
にはい込んできたくらいです。けれども大体の上において、
私の未来の運命は、これで定められたのだという観念が私
のすべてを新たにしました。

私は昼頃また茶の間へ出かけていつて、奥さんに、今朝
の話をお嬢さんにいつ通じてくれるつもりかと尋ねました。
奥さんは、自分さえ承知していれば、いつ話してもかまわ
なからうというようなことを言うのです。こうなるとなん
だか私よりも相手のほうが男みたやうなので、私はそれぎ
り引き込もうとしました。すると奥さんが私を引き止めて、
もし早いほうが希望ならば、今日でもいい、稽古から帰つ
てきたら、すぐ話そうと言うのです。私はそうしてもらう
ほうが都合がいいと答えてまた自分の室に帰りました。し

を忘れてしまいました。男のようにはきはきしたところの
ある奥さんは、普通の女と違つてこんな場合には大変心持
ちよく話のできる人でした。「よござんす、差し上げま
しょう」と言いました。「差し上げるなんて威張つた口の
きける境遇ではありません。どうぞもらつてください。ご
存じのとおり父親のない憐あはれな子です」と後では向こうか
ら頼みました。

話は簡単でかつ明瞭に片付いてしまいました。最初から
しまいまでに恐らく十五分とはかからなかつたでしょう。
奥さんはなんの条件も持ち出さなかつたのです。親類に相
談する必要もない、後から断ればそれでたくさんだと言
いました。本人の意向さえ確かめるに及ばないと明言しまし
た。そんな点になると、学問をした私のほうが、かえつて
形式に拘泥するくらいに思われたのです。親類はとにかく、
当人にはあらかじめ話して承諾を得るのが順序らしいと私
が注意した時、奥さんは「大丈夫です。本人が不承知のと
ころへ、私があの子をやるはずがありませんから」と言
いました。

かし黙つて自分の机の前に座つて、二人のこそこそ話を遠
くから聞いている私を想像してみると、なんだか落ち着い
ていられないやうな気もするのです。私はとうとう帽子を
かぶつて表へ出ました。そうしてまた坂の下でお嬢さん
行き合いました。なんにも知らないお嬢さんは私を見て驚
いたらしかつたのです。私が帽子を脱とつて、「今お帰り」
と尋ねると、向こうではもう病氣は癒なほつたのかと不思議そ
うに聞くのです。私は「ええ癒なほりました、癒なほりました」と
答えずに12水すい道どう橋はしの方へ曲がつてしまいました。

13 猿ざる柴ぢ町ちやうから神じん保ほう町ちやうの通りへ出て、小お川が町まちの方へ曲が
りました。私ががこの界かい隈わいを歩くのは、いつも古本屋をひや
かすのが目的でしたが、その日は手擦れのした書物などを
眺める気が、どうしても起こらないのです。私は歩きなが
ら絶えず宅のことを考えていました。私にはさつき奥さ

12 水道橋 神田川に架かる橋。小石川の方から水道

橋を渡ると、橋の向こう側は現在の東京都千代田

区神田三崎町になる。

13 猿楽町・神保町・小川町 現在の東京都千代田区
にあった町名。

んの記憶がありました。それからお嬢さんが宅へ帰ってからの想像がありました。私はつまりこの二つのもので歩かせられていたようなものです。その上私は時々往来の真ん中で我知らずふと立ち止まりました。そうして今頃は奥さんがお嬢さんにもうあの話をしている時分だろうなどと考えました。またある時は、もうあの話が済んだ頃だとも思いました。

5

私はとうとう万世橋を渡って、明神の坂を上がって、本郷台へ来て、それからまた菊坂を下りて、しまいに小石川の谷へ下りたのです。私の歩いた距離はこの三区にまたがって、いびつな円を描いたとも言われるでしょうが、私はこの長い散歩の間ほとんどKのことを考えなかったのです。今その時の私を回顧して、なぜだと自分に聞いてみてもいっこうわかりません。ただ不思議に思うだけです。私の心がKを忘れ得るくらい、一方に緊張していたと見ればそれまでですが、私の良心がまたそれを許すべきはずはなかったのですから。

15

Kに対する私の良心が復活したのは、私が宅の格子を開

けて、玄関から座敷へ通る時、すなわち例のごとく彼の室を抜けようとした瞬間でした。彼はいつものとおりに机に向かって書見をしていました。彼はいつものとおりに書物から眼を離して、私を見ました。しかし彼はいつものとおりに帰ったのかとは言いませんでした。彼は「病気はもういいの、医者へでも行ったのか」と聞きました。私はその刹那に、彼の前に手をつけて、あやまりたくなかったです。しかも私の受けたその時の衝動は決して弱いものではなかったのです。もしKと私がたった二人曠野の真ん中にも立っていたならば、私はきつと良心の命令に従って、その場で彼に謝罪したろうと思います。しかし奥には人がいます。私の自然はすぐそこで食い止められてしまったのです。そうして悲しいことに永久に復活しなかったのです。

10

夕飯の時Kと私はまた顔を合わせました。なんにも知ら

ないKはただ沈んでいただけで、少しも疑い深い眼を私に向けません。なんにも知らない奥さんはいつものようでした。私だけがすべてを知っていたのです。私は鉛のような飯を食いました。その時お嬢さんはいつものようにみんなと同じ食卓に並びませんでした。奥さんが催促すると、次の室でたぐいと答えるだけでした。それをKは不思議そうに聞いていました。しまいにどうしたのかと奥さんに尋ねました。奥さんはおおたきまりが悪いのだからと行って、ちよつと私の顔を見ました。Kはなお不思議そうに、なんでもきまりが悪いのかと追及しにかりました。奥さんは微笑しながらまた私の顔を見るのです。

10

私は食卓に着いた初めから、奥さんの顔つきで、事の成り行きをほぼ推察していました。しかしKに説明を与えるために、私のいる前で、それをことごとく話されてはたま

14 万世橋 現在の東京都千代田区神田淡路町と外神田を結ぶ、神田川に架かる橋。

15 明神の坂 現在の東京都千代田区外神田にある神田明神の南側を上がる坂道。

16 菊坂 現在の東京都文京区本郷四丁目と本郷五丁目と本郷六丁目の境にある坂道。

17 この三区 当時の小石川区・神田区・本郷区。現在の東京都文京区・千代田区の一部。



らないと考えました。奥さんはまたそのくらいのことを平気でする女なのですから、私はひやひやしたのです。幸いにKはまた元の沈黙に戻りました。平生より多少機嫌のよかつた奥さんも、とうとう私の恐れを抱いている点までは話を進めずにしまいました。私はほっと一息して室へ帰りました。しかし私がこれから先Kに対してとるべき態度は、どうしたものだろうか、私はそれを考えずにはいられませんでした。私はいろいろの弁護を自分の胸でこしらえてみました。けれどもどの弁護もKに対して面と向かうには足りませんでした。卑怯な私はついに自分で自分をKに説明するのがいやになったのです。



私はそのまま二、三日過ぎました。その二、三日の間Kに対する絶えざる不安が私の胸を重くしていたの言うまでもありません。私はただでさえなんとかしなければ、彼にすまないと思つたのです。その上奥さんの調子や、お嬢さんの態度が、始終私を突つくように刺激するのですから、私はなおつらかつたのです。どこか男らしい気性を

は、たとい一分一厘でも、私には堪え切れない不幸のように見えました。

要するに私は正直な道を歩くつもりで、つい足を滑らしたばかりでした。もしくは狡猾な男でした。そうしてそこに気のついていっているものは、今のところただ天と私の心だけだつたのです。しかし立ち直つて、もう一歩前へ踏み出そうとするには、今滑つたことをせひとも周囲の人に知られなければならぬ窮境に陥つたのです。私はあくまで滑つたことを隠したがりました。同時に、どうしても前へ出ずにはいられなかつたのです。私はこの間に挟まってまた立ちすくみました。

五、六日たつた後、奥さんは突然私に向かつて、Kにあのことを話したかと聞くのです。私はまだ話さないと答えました。するとなぜ話さないのかと、奥さんが私をなじめるのです。私はこの問いの前に固くなりました。その時奥さんが私を驚かした言葉を、私は今でも忘れずに覚えています。

「道理でわたしが話したら変な顔をしていましたよ。あな

そなえた奥さんは、いつ私のことを食卓でKにすつば抜かないとも限りません。それ以来ことに目立つように思えた私に対するお嬢さんの拳止動作も、Kの心を曇らす不審の種類とならないとは断言できません。私はなんとかして、私とこの家族との間に成り立つた新しい関係を、Kに知らせなければならぬ位置に立ちました。しかし倫理的に弱点をもっている、自分で自分を認めている私には、それがまた至難のことのように感ぜられたのです。

私は仕方がないから、奥さんに頼んでKに改めてそう言つてもらおうかと考えました。無論私のいない時にです。しかしありのままを告げられては、直接と間接の区別があるだけで、面目のないのには変わりはありません。といつて、こしらへ拵事を話してもらおうとすれば、奥さんからその理由を詰問されるに決まっています。もし奥さんにすべての事情を打ち明けて頼むとすれば、私は好んで自分の弱点を自分の愛人とその母親の前にさらけ出さなければなりません。真面目な私には、それが私の未来の信用に關すると思われなかつたのです。結婚する前から恋人の信用を失うの

たもよくないじゃありませんか、平生あんなに親しくしている間柄なのに、黙つて知らん顔をしているのは」

私はKがその時何か言いはしなかつたかと奥さんに聞きました。奥さんは別段なんにも言わないと答えました。しかし私は進んでもっと細かいことを尋ねずにはいられませんでした。奥さんはもとより何も隠すわけがありません。たいした話もないがと言いながら、いちいちKの様子を語つて聞かせてくれました。

奥さんの言うところを総合して考えてみると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち着いた驚きをもつて迎えたらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初はそうですかとただひと口言っただけだつたそうです。しかし奥さんが、「あなたも喜んでください」と述べた時、彼は初めて奥さんの顔を見て微笑を洩もらしながら、「おめでとうございます」と言つたまま席を立つたそうです。そうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返つて、「結婚はいつですか」と聞いたそうです。それから「何かお祝いをあげたいが、私は金がないからあ

げることができません」と言ったそうです。奥さんの前に座っていた私は、その話を聞いて胸が塞がるような苦しさを覚えました。



勘定してみると奥さんがKに話をしてからもう二日あまりになります。その間Kは私に対して少しも以前と異なった様子を見せなかったもので、私は全くそれに気がつかずにいたのです。彼の超然とした態度はたとい外観だけでもせよ、敬服に値すべきだと私は考えました。彼と私を頭の中で並べてみると、彼のほうがはるかに立派に見えました。

「おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」という感じが私の胸に渦巻いて起こりました。私はその時さぞKが軽蔑していることだろうと思って、一人で顔を赤らめました。しかし今さらKの前に出て、恥をかかせられるのは、私の自尊心にとって大いな苦痛でした。

私が進むのかよそうかと考えて、ともかくも翌日まで待とうと決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、Kは自殺して死んでしまったのです。私は今でもその光景

聞かされた時のそれとほぼ同じでした。私の眼は彼の室の中をひと目見るやいなや、あたかもガラスで作った義眼のように、動く能力を失いました。私は棒立ちに立ちすくみました。それが疾風のごとく私を通過したあとで、私はまたあしまたと思いました。もう取り返しがつかないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯をものごく照らししました。そうして私はがたがた震えたのです。

それでも私はついに私を忘れることができませんでした。私はすぐ机の上に置いてある手紙に眼をつけました。それは予期どおり私の名宛てになっていました。私は夢中で封を切りました。しかし中には私の予期したようなことにはなにも書いてありませんでした。私は私にとってどんなにつらい文句がその中に書き連ねてあるだろうと予期したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの眼に触れたら、どんなに軽蔑されるかもしれないという恐怖があったのです。私はちよつと眼を通しただけで、まず助かったと思えました。(もとより世間体の上だけで助かったので

を思い出すとぞつとします。いつも東枕で寝る私が、その晩に限って、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因縁かもしれませぬ。私は枕元から吹き込む寒い風でふと眼を覚ましたのです。見ると、いつも立て切つてあるKと私の室との仕切りの襖が、この間の晩と同じくらい開いています。けれどもこの間のように、Kの黒い姿はそこには立っていません。私は暗示を受けた人のように、床の上に肘をついて起き上がりながら、きつとKの室を覗きました。ランプが暗くともっているのです。それで床も敷いてあるのです。しかし掛け布団は跳ね返されたように裾の方に重なり合っているのです。そうしてK自身は向こうむきに突っ伏しているのです。

私はおいと言って声をかけました。しかしなんの答えもありません。おいどうかしたのかと私はまたKを呼びました。それでもKの身体はちつとも動きません。私はすぐ起き上がって、敷居際まで行きました。そこから彼の室の様子を、暗いランプの光で見回してみました。

その時私の受けた第一の感じは、Kから突然恋の告白ですが、その世間体がこの場合、私にとっては非常な重大事件に見えたのです。) 手紙の内容は簡単でした。そうしてむしろ抽象的でした。自分は薄志弱行でとうてい行く先の望みがないから、自殺するとうだけなのです。それから今まで私に世話になった礼が、ごくあつさりした文句でその後に付け加えてありました。世話ついでに死後の片付け方も頼みたいという言葉もありました。奥さんに迷惑をかけてすまんからよろしくわびをしてくれという句もありました。国元へは私から知らせてもらいたいという依頼もありました。必要なことはみんなひと口ずつ書いてある中にお嬢さんの名前だけではどこにも見えません。私はしまいまで読んで、すぐKがわざと回避したのだということに気がつきました。しかし私の最も痛切に感じたのは、最後に墨の余りで書き添えたらしく見える、もつと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろうかという意味の文句でした。

私は震える手で、手紙を巻き取めて、再び封の中へ入れました。私はわざとそれをみんなの眼につくように、元の

とおりの机の上に置きました。そうして振り返って、襖にほとばしっている血潮をはじめて見たのです。



私は突然Kの頭を抱えるように両手で少し持ち上げました。私はKの死に顔がひと目見たかったです。しかしうつ伏しになっている彼の顔を、こうして下から覗き込んだ時、私はすぐその手を放してしまいました。ぞつとしたばかりではないのです。彼の頭が非常に重たく感ぜられたのです。私は上から今触った冷たい耳と、平生に変わらない五分刈りの濃い髪の毛をしばらく眺めていました。私は少しも泣く気にはなれませんでした。私はただ恐ろしかったのです。そうしてその恐ろしさは、眼の前の光景が官能を刺激して起こる単調な恐ろしさばかりではありません。私は忽然と冷たくなったこの友達によって暗示された運命の恐ろしさを深く感じたのです。

私はなんの分別もなくまた私の室に帰りました。そうして八畳の中をぐるぐる回り始めました。私の頭は無意味でも当分そうして動いていると私に命令するのです。私はど

下女はその関係で六時頃に起きるわけになっていました。

しかしその日私が下女を起こしに行ったのはまだ六時前でした。すると奥さんが今日は日曜だと言って注意してくれました。奥さんは私の足音で眼を覚ましたのです。私は奥さんに眼が覚めているなら、ちよつと私の室まで来てくれと頼みました。奥さんは寝巻の上へふだん着の羽織を引っ掛けて、私の後について来ました。私は室へ入るやいなや、今まで開いていた仕切りの襖をすぐ立て切りました。そうして奥さんにとんだことができたと小声で告げました。奥さんはなんだと聞きました。私は顎で隣の室を指すようにして、「驚いちゃいけません」と言いました。奥さんは蒼い顔をしました。「奥さん、Kは自殺しました」と私が

また言いました。奥さんはそこに居すくまったように、私の顔を見て黙っていました。その時私は突然奥さんの前へ手を突いて頭を下げました。「すみません。私が悪かったのです。あなたにもお嬢さんにもすまないことになりました」とあやまりました。私は奥さんと向かい合うまで、そんな言葉を口にする気はまるでなかったのです。しかし奥

うかしなければならぬと思いました。同時にもうどうすることもできないのだと思いました。座敷の中をぐるぐる回らなければならぬなくなったのです。檻の中へ入れられた熊のような態度で。

私は時々奥へ行つて奥さんを起こそうという気になります。けれども女にこの恐ろしいありさまを見せては悪いという心持がすぐ私を遮ります。奥さんはとにかく、お嬢さんを驚かすことは、とてもできないという強い意志が私を抑えつけます。私はまたぐるぐる回り始めるのです。

私はその間に自分の室のランプをつけました。それから時計を折々見ました。その時の時計ほど埒の明かない遅いものはありませんでした。私の起きた時間は、正確にわかないのですけれども、もう夜明けに間もなかったことだけは明らかです。ぐるぐる回りながら、その夜明けを待ち焦がれた私は、永久に暗い夜が続くのではなからうかという思いに悩まされました。

我々は七時前に起きる習慣でした。学校は八時に始まることが多いので、それでないとは授業に間に合わないのです。

さんの顔を見た時不意に我とも知らずそう言ってしまったのです。Kにあやまることのできない私は、こうして奥さんとお嬢さんにわびなければならぬのだと思つてください。つまり私の自然が平生の私を出し抜いてふらと懺悔の口を開かしたのです。奥さんがそんな深い意味に、私の言葉を解釈しなかったのは私にとつて幸いでした。蒼い顔をしながら、「不慮のできごとなら仕方がないじゃありませんか」と慰めるように言ってくれました。しかしその顔には驚きと怖れとが、彫り付けられたように、固く筋肉をつかんでいました。

Kの自殺後、私と奥さんとお嬢さんは相談の上、家を移ることにした。その引越してから二か月ほどして、私は大学を卒業し、卒業から半年もたないうちに、私はお嬢さんと結婚したのである。私は幸福であったが、その幸福には黒い影がとりついていた。黒い影にとりつかれた私は、ある時は書物の中に自分を生き埋めにしようとし、ある時は酒に溺れようとし、そうして寂寞のうちに、死んだつもりで生き続けた。

5

そんなふうに住んでいた私が、ある年の夏、鎌倉の海岸で一人の青年（「上・中」の（私））と出会った。その青年は私の家に入りようになり、私と青年のつきあいが始まる。つきあいは続き、やがて青年は大学を卒業すると、卒業証書を手にもったん故郷の両親のもとへ帰っていった。青年が東京を離れている間に、明治天皇が崩御し、乃木大将が殉死をした。殉死から二、三日して、私は自殺を決意する。そして、私は青年に向けて、自分の過去を物語ることにしたのである。私は自分の過去を、お嬢さんとKと私との間にあつた事件を、青年に送る遺書の中に書き記した。遺書の最後は次のように結ばれていた。

10

「私は私の過去を善悪ともに他の参考に供するつもりです。しかし妻だけはたった一人の例外だと承知してください。私は妻にはなんにも知らせたくないのです。妻が己の過去に対してもつ記憶を、なるべく純白に保存しておいてやりたいのが私の唯一の希望なのですから、私が死んだ後でも、妻が生きている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、すべてを腹の中にしまっておいてください。」

15

18 乃木大将 乃木希典。一八四九（嘉永二）年〜一九二二（大正元）年。明治時代の陸軍軍人。

● 夏目漱石 一八六七（慶応三）年〜一九一六（大正五）年。小説家・英文学者。

東京都の生まれ。第一高等学校・東京帝国大学で教鞭をとったのち朝日新聞社に入り、本格的な職業作家として活躍する。「個人主義」をテーマとした作品は、日本近代文学に多大な影響を与えた。小説に「吾輩は猫である」「坊っちゃん」「三四郎」「それから」「行人」などがある。

■ 出典 『漱石全集 第六巻』（一九六六年）

初出 『朝日新聞』（一九一四年四月二〇日〜八月二一日）



乃木大将の殉死を伝える新聞と殉死当日の乃木大将夫妻。